

氏名(本籍)	平 ^{たいら} 正 ^{まさ} 人 ^と (福島県)
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	博乙第2161号
学位授与年月日	平成17年12月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	フランス革命における新聞の形態学 - 出版戦略と新聞版画 -
主査	筑波大学教授 Docteur de 3 ^o cycle (文学) 立川孝一
副査	筑波大学教授 博士(文学) 木村和男
副査	筑波大学助教授 博士(文学) 中野目 徹
副査	筑波大学助教授 Ph. D. (文学) 山田重郎

論文の内容の要旨

本論文は、フランス革命の開始と共に大量に創刊されるようになった新聞を1次史料としてとりあげ、その印刷工程や販売方法、さらにテキストや版画を分析することにより、新聞が革命期の世論形成にどう関わったかを解明しようとする研究である。

論文は、序論、本論6章、結論、史料・文献一覧から構成されている。

「序論」においては、史料としての新聞を再評価しようとする近年の研究動向に触れたあとで、新聞の「形態学」とは何かについて説明があり、次にフランス革命史学における史料編纂の経緯が述べられ、最後に、「ジャコバン史学」と「修正主義」の論争がとりあげられている。

従来のフランス革命史においては、議事録や法令などのいわゆる公文書が1次史料とみなされ、新聞やパンフレットなどの印刷資料は党派的な性格があるために、2次史料並みの扱いを受けてきた。しかし近年における社会史-とりわけ心性史や政治文化論-の台頭と共に、公文書以外の印刷物や図像などにも目が向けられるようになった。それに加えて「公共圏」への関心が高まり、「世論」の形成に大きな役割を果たしたと思われる新聞を研究対象にとりあげる歴史家が増えてきている。

近年の新聞研究は、「新聞それ自体」がどのようなメディアであったかということに着目する。けれども、未だにテキストの分析が主であり、新聞の物質的な「形態」にまでは目が向けられていない。書物の形態に関してはこれまで書誌学が、書物を構成している物質的要素(紙、活字、印刷、製本、装丁)をとりあげると共に、出版後の流通や受容などの社会的文化的側面にまで注意を払ってきた。著者の言う「形態学」とは、新聞をテキストに限定せず、その形態的な特徴にまず注目し、それを政治文化的な文脈の中で捉えなおそうとするものであるが、具体的には印刷や輸送などの技術的側面、販売方法などの商業的な側面、版画などの視覚的側面、そして新聞の購読が読者に仕向けるであろう読書実践までがその考察対象となる。

フランス革命と史料との関わりについては、革命100周年(1889年)から革命200周年(1989年)までのプロセスが概観され、政治史から、社会経済史、そして社会史(心性史、政治文化論)への移行の中で、「史料」の意味や形態が変わってきたことが確認される。

1970年代に始まった「ジャコバン史学」と「修正主義」の論争については、前者が貴族とブルジョワジーの「階級闘争」を強調していたのに対して、後者が自由主義貴族と上層ブルジョワジーからなる「エリート層」の存在を主張したという経緯が紹介される。著者は、「階級闘争」説はもはや支持しがたく、「エリート層」説もまた一面的であるとする。むしろ、エリートから民衆に至るまで幅広く、多様な階層が革命に参加していたと考えるべきであり、それ故、その際「世論」をたばねるにあたって新聞の果たした役割がきわめて大きかったことを認めるべきであるという。

第1章「フランス革命新聞研究の歴史」では、画期的な研究として「ゴドショ学派」による新聞研究を評価しつつも、それでもまだ新聞を党派による世論操作の手段とみなすばかりでは一面的で、不十分であるとする。しかし近年になって「リヨン・グルノーブル学派」がテキスト論や読者論の視点から新聞の再解釈を試み、またP・レタが「新聞それ自体」に注目し、テキスト以外の物質的形態や出版戦略にも目を向けるように提案しているが、実証的な研究はまだ始まったばかりであるとする。

第2章「フランス革命における新聞の出版戦略」では、著者はP・レタによっても手をつけられなかった領域に踏み込んでいる。すなわち、新聞の印刷工程、その販売方法や流通経路などであるが、新聞は革命期における「商品」でもあったので、著者はビジネスとしての収支計算もおこなっている。

第3章「定期購読がうながす読書実践」では、前章で述べられた「商業的期待」と背中合わせの関係にある「政治的期待」に目が向けられる。革命期の新聞では利益確保のために定期購読という方法が採用されていたが、それは出版側と読者とのあいだに継続的な関係を打ち立てるとともに、次に述べるような読書実践を購読者に仕向けることにもなった。つまり、3ヶ月（予約購読期間）毎に合本された新聞を、読者は継続的に読み返すようになり、時としては事件の記事や版画をスクラップブックに編集し、自ら革命史のコレクションを作成する例もあった、という。

第4章「新聞版画」では、版画の技法的な特徴とその掲載方法を詳しく説明したあとで、左派と右派の代表的な新聞5紙を例にとり、掲載された版画の表現方法（リアリズムとカリカチュア）のちがいを比較している。

第5章「新聞報道」では、具体的な事件（1791年5月3日におけるローマ教皇の人形の火刑）を例にとり、テキストと版画を相互に参照しながら詳細な分析をおこなっている。とりあげられた3つの新聞は、同一の事件を報道しながらもそれに異なった意味を付与しており、そこに革命期の新聞の特徴があると著者は言う。

第6章「新聞記者と新聞」では、視野を広げて、古典古代的なアレゴリー表現やキリスト教的図像学の系譜の中に革命期の新聞版画を位置づけ、そこに描かれた新聞記者や新聞の中にキリスト教の使徒やバイブルに連なるイメージのあることを確認している。

「結論」において、フランス革命における新聞は、事実をありのままに伝える客観的な媒体でもなければ、イデオロギーを押しつける党派の政治的な手段でもなく、むしろ国民的規模で世論を形成するコミュニケーション手段であったことが確認される。つまり新聞は一度汲み上げた読者の声に出版側の声を重ね合わせることによって世論を再構築していたのである。それ故、フランス革命を「ブルジョワ革命」あるいは「エリート革命」という枠組によって説明するだけでは不十分であり、むしろ知識人から民衆に至るまでの幅広い読者層をまきこんだジャーナリズムによる革命とみなすことができるのではないか、と著者は言う。

審査の結果の要旨

19世紀中頃まで、フランス革命の歴史は当時の新聞や同時代人の回想録などを主たる史料として書かれていた。議事録や法令・通達などの手稿資料（公文書）を用いて研究がなされるようになったのは19世紀末からのことである。その結果として、新聞やパンフレットなどの印刷資料は党派的な色合いが濃くして

しりぞけられるか、あるいははじめから党派のイデオロギーを知るための材料とみなされるかのどちらかであった。ところが社会史（心性史、政治文化論）の台頭や、公共圏への関心が高まる中で、新聞はその1次史料としての価値を見直されるようになった。フランス革命を階級闘争や党派抗争としてではなく、「世論」を媒介とする政治的公共圏の形成過程として捉えるなら、新聞やパンフレットはもはや2次的な史料ではない。本論文は、フランス革命史研究の流れの中でも、最も新しい潮流に属していると言える。

フランス革命史学の古典的な成果についても、著者はオラル（1849-1928）以降の研究史をよく調べている。つまり、オラルの時代は政治家中心の政治史であったが、次第に社会経済史に力点が移行し、貴族とブルジョワジーの階級闘争を強調する「ジャコバン史学」が台頭した。だが革命的ブルジョワジーの実態については「修正主義」からの批判もあり、その存在は今日では曖昧なものとなされている。加えて「政治文化」や「公共性」という考えが「文化」あるいは「世論」の重要性を認めている現在の学界状況においては、民衆の世界を「政治」や「権力」に導いていく媒体についての実証的な研究が求められており、その意味でも新聞をエリートと民衆とのあいだのコミュニケーション手段として捉え、そこに「世論」の形成を見ようとする著者の視点は実に適切であると言える。

こうした目的意識の下に著者が実際にとりあげた新聞の数は30タイトルを超える。現代の新聞にくらべて版型が小さく頁数も少ないとはいえ、1タイトルだけで1万頁を超えることもある新聞を30紙以上も読みくらべるということは途方もない作業であり、著者の熱意と努力は賞賛に値する。このようにオリジナルな史料を可能な限り広く渉猟したことが、本論文に具体性と信憑性を与えることに貢献している。

アンシャン・レジームからフランス革命期にかけての書物や新聞に関する研究については、当然のことながら著者はよく通じているが、特筆すべきは図像学についても著者がそれを基礎から学び、歴史学に応用していることである。

ただし、問題点がないわけではない。印刷の工程、販売や流通の方法、そして版画の分析など、これまで未開拓であった分野が著者の意欲的な研究によって明らかにされようとしているのは実に歓迎すべきことだが、そうした諸領域を「新聞の形態学」としてひとつにまとめるためには「形態」とは何かについてよりいっそう整合的な定義がなされるべきであった。著者は書誌学をモデルにしているようだが、それがそのままフランス革命の新聞研究にも応用されるものだろうか。著者の言う「形態学」においては、活字、紙質、版型のような物質的な形態も含まれているはずなのに、考察の主たる対象となったのは定期購読のような出版戦略と新聞に掲載された版画である。新聞の形態をトータルに捉えるのだとしたら、出版戦略や新聞版画以外の「物質的」な側面についても検討を加える必要があるだろう。歴史研究においては未だ定着していない名称であるだけに、今後はより説得力のある定義とより幅広い論証とが望まれる。

とはいえ、第5章「新聞報道」において示されたような、テキストと図像を比較しながら新聞報道の虚と実のかけひきを分析した部分などは実に説得力がある。史料に密着しようとする努力と、その奥に歴史の意味をさぐろうとする著者の心意気がうまくかみ合った好結果と言えよう。

本論文は、膨大な量の史料を扱いながらも、単なる事実確認に終始するのではなく、独自の仮説を立ててそれを検証しようとした、きわめて独創的な研究であり、学界への貢献も大なるものと認められる。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。